



漆塗り下駄



漆塗り碗・皿



ちょうぎん
丁銀

大坂城跡発掘調査現地説明会資料 Vol.1

平成3年2月16日

大坂城跡の発掘調査

(財)大阪文化財センター



ちがいくさめきもん
違釘抜紋金箔瓦

五七桐紋金箔瓦

菊紋金箔瓦



豊臣期大坂城外郭線推定図

西暦	年号	でき事
1582	天正10	本能寺の変 山崎の合戦
1583	天正11	賤ヶ岳の合戦 秀吉、摂津を領有 本丸築城開始
1584	天正12	小牧・長久手の戦い 本丸完成
1585	天正13	秀吉、関白となる
1586	天正14	二の丸築造開始 秀吉、太政大臣となり豊臣姓を名乗る
1588	天正16	二の丸完成 刀狩令
1590	天正18	秀吉、天下統一
1591	天正19	千利休、自害 関白を秀次に譲る
1592	文禄元	文禄の役
1594	文禄3	惣構築造開始
1595	文禄4	秀次から関白職を剥奪、自殺させる
1596	慶長元	慶長の大地震
1597	慶長2	慶長の役
1598	慶長3	三の丸築造開始、秀吉死す
1600	慶長5	関が原の合戦
1603	慶長8	家康、征夷大將軍となり、江戸幕府を開く
1605	慶長10	秀忠、征夷大將軍となる
1609	慶長14	秀頼、方広寺大仏再建に着手
1614	慶長19	大坂冬の陣 大坂城外堀を埋められる
1615	慶長20	大坂夏の陣 大坂城落城 豊臣氏滅ぶ
1615	元和元	松平忠明、大坂城主となり、焼跡整理を行う
1620	元和6	幕府による大坂城の修築工事開始
1626	寛永3	天守竣工、本丸普請成る
1629	寛永6	大坂城再築工事完成

大坂城関連年表

大坂城三の丸とは

本能寺の変で織田信長が倒れた後、賤ヶ岳の合戦で柴田勝家を破った秀吉は、大坂に本拠地となる城をつくる計画をたてました。本丸、二の丸が完成した後、惣構の堀を掘って城の形はできましたが、秀吉は重病中にもかかわらず、惣構の内側に三の丸をつくることを命じました。三の丸には、伏見から多くの大名屋敷を移転させ、軍用施設なども設けられたといわれています。秀吉の死後も工事は続けられ、翌年にやっと大坂城は完成しました。

三の丸は、大坂冬の陣の後に完全に破壊されたため、以前は位置や規模がわかりませんでした。ところが、『偃台武鑑』の「大坂冬の陣配陣図」に三の丸がはっきりと描かれていることがわかり、位置が推定できるようになりました。さらに最近、周辺で発掘調査が行われるようになり、大阪市中央体育館などの調査によって、徐々に三の丸内の屋敷や堀、石垣などの状況が明らかになりつつあります。

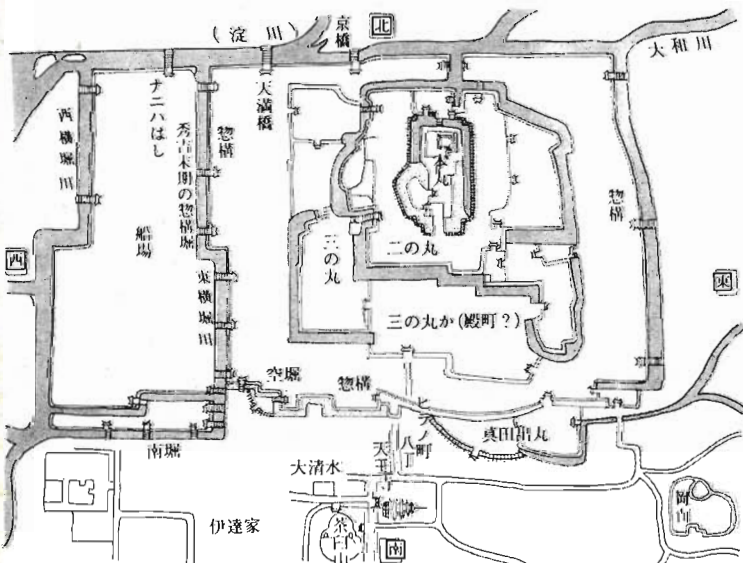
調査経過

今回の調査は、大阪府庁舎周辺整備事業に伴うもので、新別館建設予定地にあたります。周辺の調査成果により、豊臣時代の生活面が後世の相次ぐ盛土で、現地表下約8mにあることが推定されたため、周囲に鋼矢板を二重に打ち込み、土留めをおこなった調査になりました。

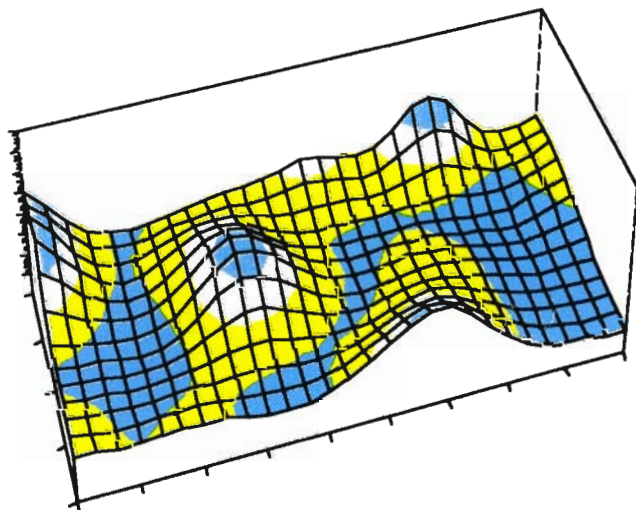
江戸時代

大坂夏の陣の後の再築工事により、城内は大規模な盛土でおおわれ、豊臣時代の大坂城は完全に姿を消しました。調査地周辺は約4mにおよぶ盛土でおおわれており、絵図などで城代に次ぐ役人である、京橋口御定番の下屋敷として使われていたことがわかっています。

江戸時代の屋敷の構造は、はっきりしませんでした。縁石や鍛冶炉の炉床、石組の貯蔵穴、ゴミ穴などがみつかりました。伊万里焼などの陶磁器のほか、瓦や銅製の矢立（携帯用文具）などが出土しています。



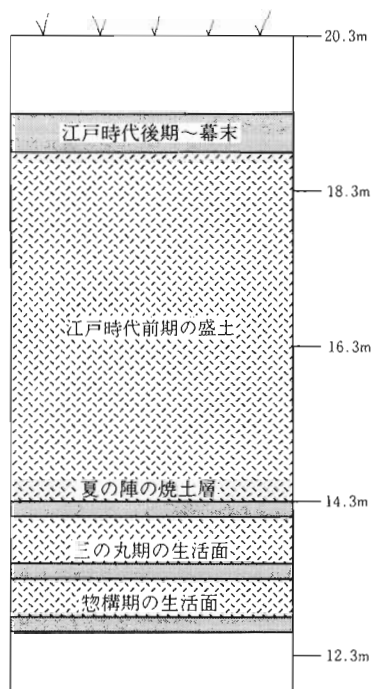
『偃台武鑑』「大坂冬の陣配陣図」一渡辺 武氏作図一



三の丸期の遺物の出土量の傾向（上が北）



夏の陣で焼けおちた建物群の復元想像図



断面模式図

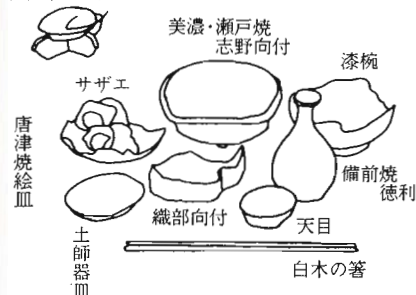
豊臣3期 そうがまえ (惣構期)

惣構期の建物群と谷が検出されました。地形は現在と大きく異なり、調査区の北約1/3と東北部は谷となり、深く下がります。今年度の調査で出土した金箔瓦の大半は、三の丸を造成した際に埋めたこの谷の堆積層からのものです。また、屋敷の範囲も細かな谷地形に制約された、小規模なものが目立ちます。なお、調査区の西半部では、約9m（5間）間隔で瓦組の排水桝をおいた、同じ規格の敷地と建物が発見されました。街路に面しておらず、個々に独立した排水施設をもつ点などから、小規模ながらも武家屋敷の一角を占めるものと考えられます。

陶磁器類 碗、皿類は佐賀県唐津焼の製品をもっとも多いものとして、瀬戸美濃焼の志野、織部、天目、中国明代の染め付けがこれに続きます。掘り鉢は備前焼が丹波焼のものよりやや多い傾向です。甕は備前焼の2石入り（約360リットル）クラスのものが見られます。



瀬戸焼灯明皿

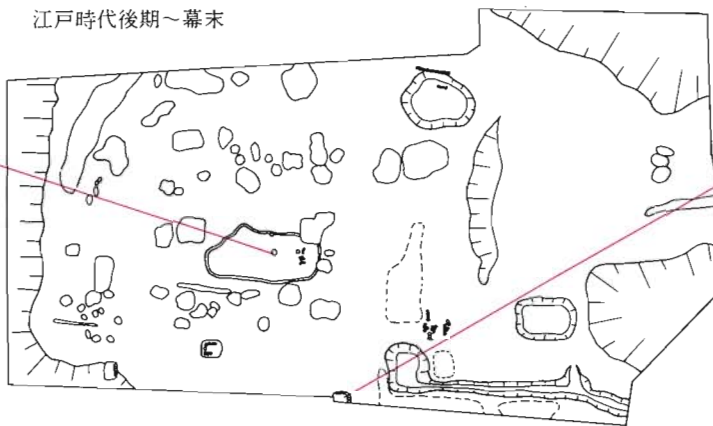


豊臣期の多彩な陶磁器



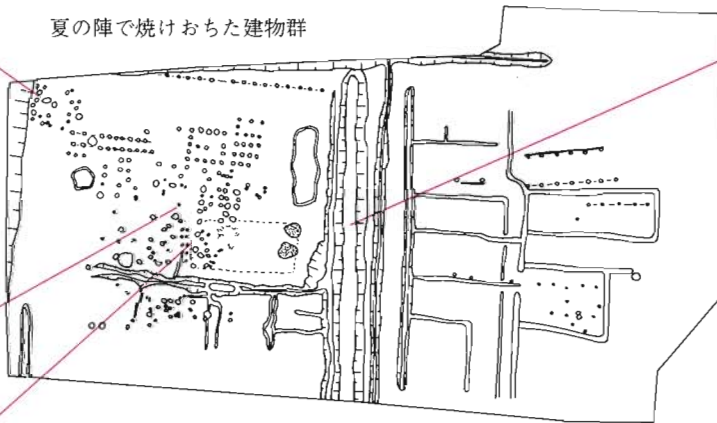
江戸時代後期～幕末

江戸時代後期～幕末



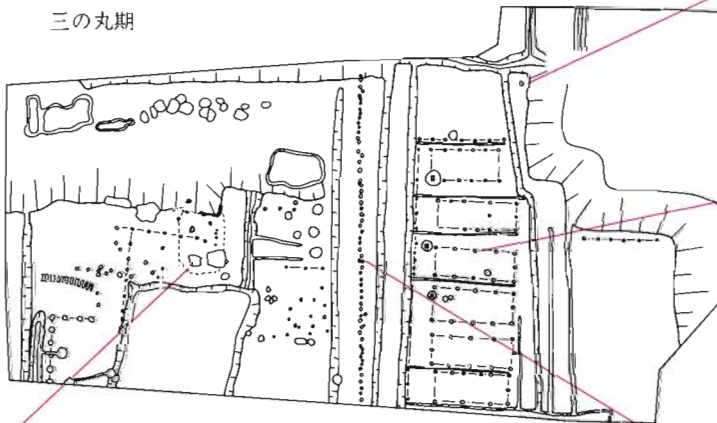
豊臣 1 期

夏の陣で焼けおちた建物群



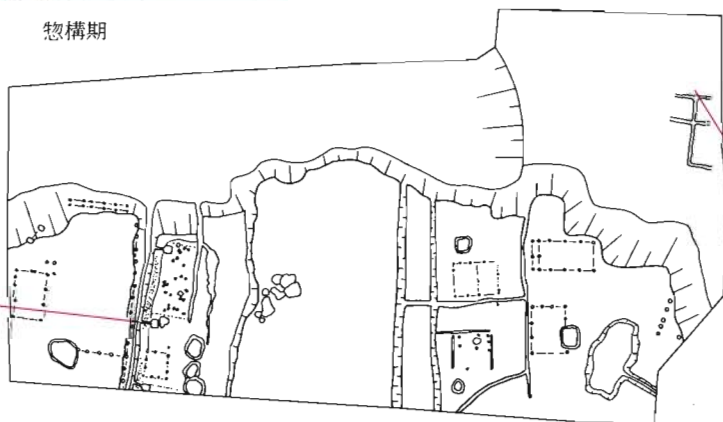
豊臣 2 期

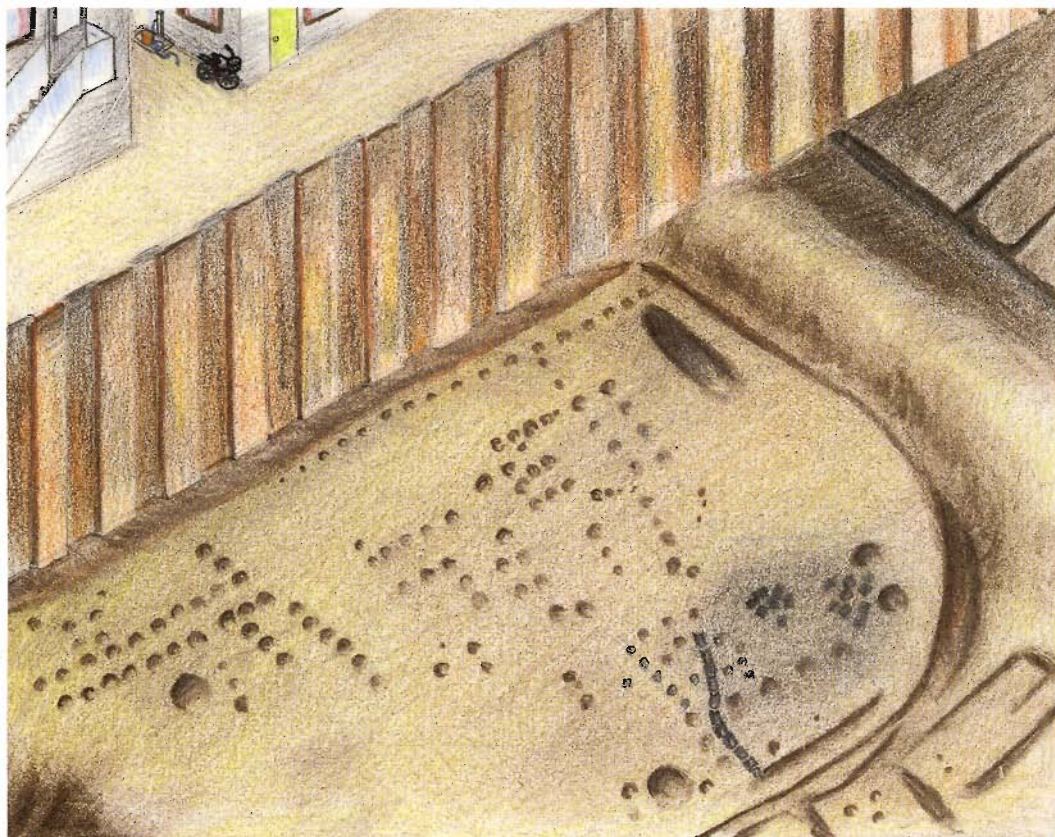
三の丸期



豊臣 3 期

惣構期





夏の陣で焼け落ちた建物群の調査



大坂夏の陣による焼土の堆積



外周部（二重矢板内）の調査

豊臣1期（夏の陣直前）

夏の陣で焼け落ちた建物群が発見されました。屋敷地は調査区のほぼ中央を南北に走る土手を東の境として、南北は溝で区切られ、西は谷町筋へ下がる斜面までと考えられます。少なくとも3棟の建物が復原できます。瓦も焼け捨てられている状況から、いずれも瓦屋根であった可能性があります。

土手の上には焼け土と雑草の根が残っており、北端には直径が20から30cm程の樹木根がありました。中心建物と考えられる部分の面は、土間状に堅く締まっており、礎石列、瓦組の排水管とともに頭蓋骨が1体発見されました。夏の陣の犠牲者でしょうか。

豊臣2期（三の丸築造期）

調査区の中央を南北方向の柵と道が走り、その西側で小規模な屋敷地、東側で大名屋敷の一部が確認されました。

西側の屋敷地は北半分を谷へ下降する斜面部として、大小のゴミ穴が連なります。宴の後を物語るように大量の箸、漆器、陶磁器、サザエの集積などが発見されました。

東側では、東端から扇に月丸紋（おおぎにつきまるもん）の軒丸瓦、北端から違釘抜紋（ちがいくぎぬきもん）の金箔瓦、菊紋の金箔瓦、南端から丁銀（ちょうぎん）が発見されました。また、大名屋敷地の西を限る南北の道に沿って、井戸と東西に細長い建物が7棟以上並びます。礎石がみられず、日常品も出土するところから、大名屋敷の外縁をとりまく下級武士達の建物群（長屋）と考えられます。



漆椀と下駄の紋様

漆製品 碗、皿類は100点近く出土しています。黒、赤色漆の両方があり、高台は高いものが目立ちます。紋様には桐、イチヨウ、草花、笹、鶴などがあります。その他に膳、漆籠、調度品の一部なども出土しています。

下駄 約100点出土し、このうち漆塗の下駄は2点です。大人用と子供用があり、大きさは大人用でも20cm程度の小さなものです。また、庭下駄とされるアゴの無い歯の広いものも多くみられます。

全て一木作りのもので、大半のものは歯が擦り減るほどよく使われています。なお一部の下駄の表面には焼印が彫刻で印をつけられたものもあります（星印＝清明文）

丁銀 三の丸期の包含層の出土です。大黒像と「宝常是」の極印がうたれ、半分以上が切り遣いされています。

まじないといのり



木製人形



そのほか 文具では毛彫りで飾られた高級な硯が多く出土しています。調度としては、^{きせる} 簾、^{まげもの} 櫛、包丁などの柄、木製荷札、煙管、曲物をはじめとして、樽は埋められて容器として使われていたものがあります。

貝は三の丸期の屋敷跡近くからサザエの集積がみつかり、骨は土坑から馬の腰骨が1体分出土するなど比較的多くみられます。

瓦類 扇に月丸紋は常陸国（茨木県）を中心とした佐竹氏の家紋として有名です。佐竹氏は秀吉の小田原攻め以来豊臣政権に従った北関東の名家で、佐竹義宣は文禄3年に伏見に屋敷をもち、54万5800石の所領を安堵されます。しかし関ヶ原の戦いで豊臣側に属し、その後は羽田国（秋田県）に20万5000石で移されました。

金箔瓦は、標準的な三つ巴紋と唐草紋以外に、桐紋、菊紋、違釘抜紋が出土しています。桐紋は羽柴姓を名乗る多くの親族をはじめとして、市内でも比較的多く出土しています。釘抜紋は江戸時代においては、清和源氏を出自とする家系がこれを用いたとされ、三好氏の系図にも載っています。違釘抜紋の類例は大坂夏の陣図屏風で有馬豊氏の兵のほかに神崎川を敗走する兵の旗印にもみられます。



玩具



おおづつ 大筒（大阪城天守閣蔵）



弾丸 鉛製、直径5cm、重さ400グラムを測ります。いわゆる百目玉と呼ばれるもので、大阪城天守閣で所蔵している江戸時代の大筒の口径がこの弾丸の大きさと一致しました。

神崎川を敗走する兵
大坂夏の陣図屏風左隻右5扇（大阪城天守閣蔵）

大坂夏の陣図屏風右隻部分（大阪城天守閣蔵）

